

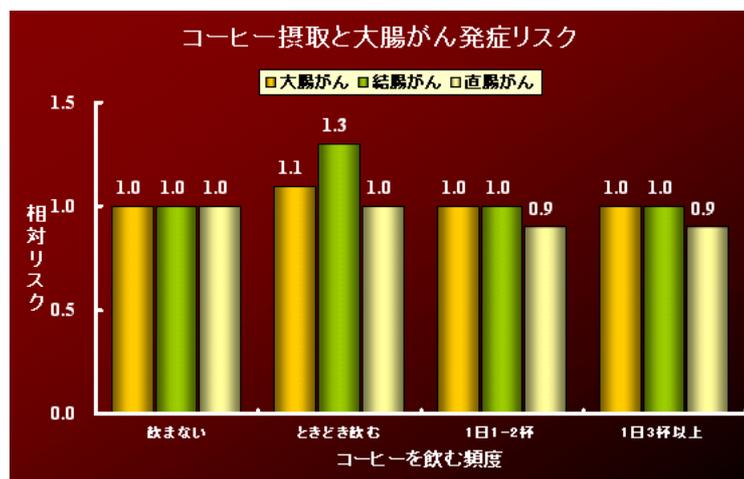
コーヒー摂取と大腸がん発症リスクの関連

Coffee consumption and the risk of colorectal cancer: A prospective cohort study in Japan.
2007年 International Journal of Cancer 発表

コーヒーを飲む量と大腸がん発症リスクは関連しない

これまでの研究から、コーヒーが大腸がんの発症リスクを低くする可能性があると考えられてきました。しかし、いくつかの大規模な疫学研究の結果は一致していませんでした。そこで私たちは宮城県内の調査集団（コホート）のデータを解析して、コーヒーを飲む量と大腸がん発症リスクとの関連を調査してみました。

この研究では、コーヒーを飲む量によって対象者を4つの群に分けて、大腸がんの発症リスクを比較しました。その結果、コーヒーを「飲まない」群と比べて、他の3つの群の大腸がん発症リスクは変わりがなく、日常生活でのコーヒーを飲む量と大腸がんを発症するリスクの間には関連がないことがわかりました。コーヒーを「飲まない」と答えた人の大腸がんを発症するリスクを1.0とすると、「ときどき飲む」と答えた人の相対リスクは1.1、「1日1-2杯飲む」と答えた人では1.0、「1日3杯以上飲む」と答えた人では1.0でした（図）。さらに、大腸がんの部位別にも検討しましたが、結腸、直腸、近位結腸、遠位結腸のいずれについても、コーヒーを飲む量と大腸がんを発症するリスクの間には関連がみられませんでした。



研究データについて

ベースライン調査：解析には「宮城県コホート」と呼ばれている、宮城県内の調査集団のデータが使われました。このデータは1990年6月から8月にかけて、宮城県内の14町村在住の40-64歳の男女5万1921人に対して生活習慣や健康状態などに関する自己記入式アンケートを配布し、うち4万7605人から有効回答を得たものです。有効回答率は92%でした。

追跡調査：ベースライン調査に答えていただいた方を対象に、その調査時から2001年12月31日まで約11年の追跡調査を実施しました。その上で、調査開始以前にがんにかかったことのある1113人と、今回の研究に関連する質問への回答に不備があった7791人を解析の対象から外しました。その結果、3万8701人（男性1万8867人、女性1万9834人）が調査対象となり、うち追跡期間中に457人（男性284人、女性173人）が大腸がんと診断されました。

コーヒーの摂取について

アンケートでは、コーヒーを飲む頻度をはじめとして、飲酒、喫煙、食事などの生活習慣、これまでに罹ったことのある病気などを尋ねています。コーヒーを飲む頻度に関する回答は「飲まない」「ときどき飲む」「1日に1-2杯」「1日に3-4杯」「1日に5杯以上」の5つから選んでもらいました。コーヒーの種類や入れ方などは尋ねていません。

他のリスク要因の影響について

この研究では、コーヒー以外の大腸がん発症に関連すると考えられる要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、性別、大腸がんの家族歴、教育歴、BMI、喫煙、飲酒、運動習慣、緑茶・紅茶の摂取、肉・野菜・果物の摂取、総カロリー摂取量、女性ではこれに加えて、生理の有無、初潮年齢、妊娠回数、初回出産年齢、出産回数といった要因について、グループ間に偏りがないように、統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

これまで、コーヒーと大腸がん発症リスクに関する研究は欧米を中心に比較的多く報告されてきましたが、大規模な疫学研究の結果は一致していませんでした。この研究では、コーヒーを飲む量と大腸がんを発症するリスクの間には関連がないことを示しました。この結果は、一般住民を対象とした大規模な調査で、比較的長い追跡期間に渡って様々な要因の影響を考慮して多くの大腸がん症例を解析して得られたものであり、信頼度が高いと考えています。

ただし、この研究ではコーヒーを飲む頻度について追跡前に1度しか調査していないので、追跡期間中のコーヒーを飲む頻度の変化を考慮できていません。また、飲んでいるコーヒーの種類や入れ方も調査できていないという限界もあります。
